



Title	＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の切換え：津軽・高知・東京下町方言の対照研究
Author(s)	牧野, 由紀子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2004, 6, p. 104-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の切換え —津軽・高知・東京下町方言の対照研究—

牧野 由紀子

【キーワード】丁寧体、普通体、方言形式、非方言形式、スタイル切換え

【要旨】

本稿では、＜丁寧体／普通体＞の切換え現象における地域差について津軽方言話者、高知幡多方言話者、東京下町方言話者の談話をとりあげ、比較分析を試みた。＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞という切換え軸を想定し、その共起関係という観点から分析した結果、丁寧体と普通体の切換えのあり方が地域によって異なることがわかった。

- (a) 津軽では初対面の調査者に対するようなフォーマルな場面では丁寧体共通語形式が強く志向され、丁寧体と方言形式との共起は厳しく避けられる。
- (b) 高知幡多ではフォーマルな場面でも丁寧体は方言形式と共起し、共通語形式は津軽ほど重視されず、丁寧度の選択において丁寧体の使用が優先される。
- (c) 東京下町では共通語と方言形式という切換え軸がないと考えられ、丁寧体と普通体の切換えの様相も方言地域と異なる。

1. はじめに

大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のスタイル切換えプロジェクト(略してSSプロジェクト。詳細は2節に述べる。)において、阿部・坂口(2002)、高木(2002)、松丸・辻(2002)による津軽、高知幡多、東京下町の調査の結果、津軽、高知幡多では老年層、若年層ともに、丁寧体(デス・マス)と普通体(ダ・スル)の切換えがスタイル切換えに大きくかかわっていることが確認された。また、東京下町ではそれら2地域とかなり様相を異にしていることがわかった。

一方、丁寧体は共通語形式と共起することが多く、＜共通語形式／方言形式＞という切換えもまた、スタイル切換えに関与していると思われる。＜丁寧体／普通体＞と、＜共通語形式／方言形式＞という二つの切換え軸はスタイル切換えにおいて、どのように関係しているのだろうか。また、地域によってその切換えのあり方にどのような違いがあるのだろうか。

本稿では津軽、高知幡多、東京下町の談話を対照し、それぞれの地域における丁寧体と普通体の切換えのあり方とその違いについて、方言形式との共起関係から分析を試みる。

以下、§2で本稿で用いる資料、§3で分析方法について述べ、§4で分析結果を地域ご

とに示し、§5で地域を比較対照し、その特徴と相違点をまとめる。

2. 資料

本稿では、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス ver.1.0 から青森県津軽方言話者、高知県幡多方言話者、東京下町方言話者のデータを資料として用いる。

SSコーパスとは大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室で2001年からスタートしたSSプロジェクトで集められたコーパスである。SSプロジェクトは(a)日本語方言話者のスタイル切り換え、(b)日本語中間言語話者のスタイル切り換え、の二つを取り上げ、その実態を記述することを目的としている。方言SSプロジェクトでは、日本各地に調査地を定め、60代老年層と20代若年層をインフォーマントとし、それぞれについてフォーマルな場面とカジュアルな場面の自然談話を録音した。フォーマルな場面としては初対面の調査者(若年層)に対する場面、カジュアルな場面としては祖父と孫、あるいは友人同士の場面を設定した。以下、老年層話者、若年層話者、調査者をそれぞれ「老」、「若」、「調」と表す。また、場面を表すときは《老-調》のように《 》で示し、談話例をあげるときは[津軽:老-調]のように[地域名:談話名]という形式で示す。SSコーパスには地域ごとに、フォーマルな談話として《老-調》《若-調》、またカジュアルな談話として《老-若》《老-老》《若-若》がある。SSプロジェクトではスタイル切り換えという観点からさまざまな言語項目についてこれら談話間の比較分析を行っている。

表1、2で津軽データの情報(阿部・坂口2002:12より抜粋)を、表3、4で高知幡多データの情報(高木2002:55より抜粋)を、表5、6で東京下町データの情報(松丸・辻2002:33より抜粋)を示す。

〔表1 津軽:インフォーマント情報*〕

	年齢	職業	居住歴
SA*	69	農業	0-:青森県弘前市
SC	66	農業	0-:青森県弘前市
YA	23	教諭	0-:青森県弘前市 18-22:東京都 22-:青森県弘前市
YC	23	会社員	0-:青森県弘前市
YF	25	学生	0-18:兵庫県姫路市 18-:大阪府池田市

*SAは老年層の分析対象者、SCは老年層の対話者、YAは若年層の分析対象者、YCは若年層の対話者、YFは調査者(若年層)を表す。

〔表2 津軽:談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老-老	SA-SC	夫婦	31分	SCが主導
老-若	SA-YA	祖父と孫	33分	YAが質問、SAが答える
老-調	SA-YF	初対面	39分	YFが質問、SAが答える
若-若	YA-YC	同年代	42分	ほぼ同量の発話
若-調	YA-YF	初対面	46分	YFが質問、YAが答える

〔表3 高知幡多：インフォーマント情報〕

	年齢	職業	居住歴
SA	76	農業	0-18：高知県宿毛市、18-19：中国（関東州）、19-21：中国（州）21-：高知県宿毛市
SC	77	石屋	0-21：高知県宿毛市、21-22：高知県朝倉、22-：高知県宿毛市
YA	16	学生	0-2：東京都目黒区 2-16：高知県宿毛市 16-：高知県大洲市
YC	16	学生	0-16：高知県宿毛市
YF	26	学生	0-15：京都市左京区 15-23：東京都江戸川区 23-：大阪府池田市

〔表4 高知幡多：談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老-老	SA-SC	親しい同年代	30分	SAが多く発話
老-若	SA-YA	祖父と孫	33分	YAが質問、SAが答える
老-調	SA-YF	初対面	30分	YFが質問、SAが答える
若-若	YA-YC	同年代	35分	YCが多く発話
若-調	YA-YF	初対面	30分	YFが質問、YAが答える

〔表5 東京下町：インフォーマント情報〕

	年齢	職業	居住歴
SA	70	元寿司職人・乾物屋	0-60：東京都中央区 60-：千葉県柏市
SC	85	元呉服屋・現ビルオーナー	0-：東京都中央区(兵役が5年あるが、地域は不明)
YA	21	寿司職人	0-：東京都中央区
YC	21	学生	0-1：福島県福島市 1-：東京都中央区
YF	28	学生	0-15：京都市左京区 15-2-：東京都江戸川区 23-：大阪府池田市

〔表6 東京下町：談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老-老	SA-SC	親しい同年代	32分	SCが多く発話
老-若	SA-YA	祖父と孫	30分	YAが質問、SAが答える
老-調	SA-YF	初対面	28分	YFが質問、SAが答える
若-若	YA-YC	親しい同年代	38分	同程度の発話量
若-調	YA-YF	初対面	28分	YFが質問、YAが答える

以下、例えば津軽方言話者について言及する場合は津軽SA・津軽YAのように表記する。

3. 分析方法

3.1. 分析項目

阿部・坂口（2002）、高木（2002）、松丸・辻（2002）によると、丁寧体の出現状況は以下

の通りである。

- ・タイプ A：丁寧体は出現しない＝普通体ベースの談話。

〔津軽：老－老〕〔津軽：老－若〕〔津軽：若－若〕

〔高知幡多：老－老〕〔高知幡多：老－若〕〔高知幡多：若－若〕

- ・タイプ A'：丁寧体は出現しない＝普通体ベースの談話。ただし、「デショ（－）」に限って丁寧体が使われる。

〔東京下町：老－若〕〔東京下町：若－若〕

- ・タイプ B：普通体と丁寧体が混ざる談話。

〔津軽：老－調〕〔高知幡多：老－調〕〔東京下町：老－調〕〔東京下町：老－老〕

- ・タイプ C：丁寧体ベースの談話＝普通体はほとんど出現しない。

〔津軽：若－調〕〔高知幡多：若－調〕〔東京下町：若－調〕

以上から、タイプ A とタイプ C の談話では、対話の相手によって丁寧体か普通体のどちらか一方が選択されているのに対し、タイプ B の談話では双方が使われ、談話内で切換えられていることがわかる。

また、以下の特徴が指摘されており、タイプ B の談話における丁寧体と普通体の切換えの様相には地域差があり、そこには＜共通語形式／方言形式＞の切換えが関係している、と考えられる。

- ・〔津軽：老－調〕では、「丁寧体が使用されている発話では他の項目も共通語形式に切換えられている。」(阿部・坂口 2002 より抜粋)
- ・〔高知幡多：老－調〕では、「SA のスタイル切換えは方言体系内でのスタイル切換えと見ることができる。」(高木 2002 より抜粋)
- ・東京下町では〔東京下町：老－調〕ではなく、〔東京下町：老－老〕で丁寧体の使用率が高くなり、「切換えには初対面など親疎の要素はあまり関与せず、むしろ相手の年齢ないし社会的地位などの要素が関与していると思われる。」(松丸・辻 2002 より抜粋)

これらのことから、本稿では、同一談話内で丁寧体と普通体の切換えのみられるタイプ B、すなわち〔津軽：老－調〕〔高知幡多：老－調〕〔東京下町：老－調〕の 3 談話を取り上げ、何をもって丁寧体と普通体の切換えをおこなっているのか、その切換えに＜共通語形式／方言形式＞の切換えがどう関係しているのか、そこにどのような地域差があるのか、について分析を試みる。

分析は丁寧体と普通体の選択が行われる節末に注目する。分析項目として、以下の 2 点を取りあげる。

①節末におけるデス・マスの出現状況から見た丁寧体と普通体の切換え

②その切換えにおける方言形式の共起関係

①については 3.2 で、②については 3.3 で具体的に説明する。

3.2. 丁寧体と普通体の切換え

丁寧体と普通体を形式の上から以下のように定義して分類し、出現数をカウントする。

〔丁寧体：デス・マス形式〕主節末および従属節末でデスマスが使われているもの。

〔普通体：非デス・マス形式〕デスマスが使われうる位置で、使われていないもの。

カウントの基準は以下のとおりである。

- ・普通体は以下の基準でカウントした。

名詞（名詞終了、コピュラがついたものを含む）、動詞、形容詞、および動詞形・形容詞形活用をする助動詞、ノダ文。いずれも過去形、否定形を含む。

- ・従属節末の普通体に関しては南（1993）により、丁寧体と共起できるB類、C類の接続助詞に前接する節末の普通体をカウントした。ただし、本調査で丁寧体との共起例がある接続助詞に限る。それ以外のは当該談話の丁寧度のレベルでは切換えの対象になっていないものと考えられるため、除く。
- ・終助詞がついた形式を含む。ただし、終助詞のうち、聞き手目当て性のないカナや一部のナは、丁寧体が共起することがなく、切換えの対象にならないため、カウントから省く。
- ・引用節内の語は除く。

3.3. 共通語と方言の切換え

丁寧体と普通体の切換えが起こる節末に注目し、節末に出現する方言形と共通語形の別を形式の上から次のように定義して分類し、出現数をカウントする。アクセントは考察から除外する。

〔方言形式〕形式的に方言形と認定できるものをいう。具体的には以下のものをさす。

- ・方言形終助詞（丁寧体に後接する推量形式を含む）
- ・方言形接続助詞
- ・その他：方言形の文末表現（断定辞、否定辞）

〔非方言形式〕形式からは方言形と認定できないものをいう。これには

(a) 話し手が積極的に共通語と認定するもの（共通語形式）

(b) 方言形式とも共通語形式ともいえないニュートラルなもの（中立形式）

の二つが含まれる。(a) は共通語終助詞や共通語接続助詞がつくもので、以下ではこれを「共通語形式」と呼ぶことにする。また、(b) には終助詞や接続助詞などが何も付かないニュートラルな形式が含まれ、このような形式は方言間の対照を行うために「 ϕ 」として扱う。よって、方言形式－ ϕ －共通語形式の3項対立とする。

以上のとおり、本稿では＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の切換え軸を想定し、以下、この切換え軸を表すときは＜丁寧体／普通体＞のように＜ ＞で表すこととする。これらの共起関係は、＜丁寧体＋共通語形式＞＜丁寧体＋方言形式＞＜普通体＋

共通語形式＞＜普通体＋方言形式＞の4通りの組み合わせが考えられる。この形式の使い分けに注目して分析を試みる。

4. 分析結果

本節では津軽、高知幡多、東京下町それぞれの地点ごとに特徴を見ていく。以下、4.1.で津軽、4.2.で高知幡多、4.3.で東京下町を扱う。

4.1. 津軽

津軽における丁寧体の出現状況、および方言形式との共起関係を見たものが表7である。
〔表7 津軽：丁寧体の出現状況〕

共起形式	丁寧体		普通体		合計
	非方言形式	方言形式	非方言形式	方言形式	
出現数	23 35.9%	0 0	35 54.7%	6 9.4%	64

上の表から以下のことがわかる。

- (1) 丁寧体が使われているが、全体としては普通体の方が数が多い。
- (2) 丁寧体では方言形式は一切、使われていない。
- (3) 普通体では非方言形式の使用が多く、方言形式の使用は少ない。

方言形式と丁寧体・普通体の共起を詳しく見るため、節末形式に注目して出現状況を見たものが表8である。

〔表8 津軽：＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の共起関係〕

共起形式	丁寧体			普通体		
	共通語形式	φ	方言形式	共通語形式	φ	方言形式
終助詞	0	23	0	3	32(18) ^{*1}	4
				ネ、ダネ、カ		ダベナ、ダイナ、 ダデヤ、ダビヨン
接続助詞	0	—	0	0	—	0
計 ^{*2}	0	23	0	3	32	4

*1 カッコ内の数字は名詞終了を表す。

*2 その他としての方言形文末形式は、煩雑になるため表8から除外した。出現例は普通体において否定辞のネが2例。

上の表からわかることは以下のとおりである。談話例も参考にして考察する。

- (1) 丁寧体は言い切りの文だけである。終助詞がついた形式はひとつもない。また、従属節中の丁寧体の使用も一例もない。丁寧体が使われているのは、以下のように調査者の質問に対して短く簡潔に答えるようなときである。

〔1〕

009YF: えー。十月ぐらいに もう できるんですか？

＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の切換え

→010SA:んーと。林檎さ、林檎の 作業にかかるからー(YF:はー)大体 あの ばらばらです(YF:ええ)あの 作業は。 [老一調]

「林檎さ」を「林檎の作業に」といいかえており、共通語で話そうという意図がうかがえる。阿部・坂口(2002)では、丁寧体が使用されている発話では他の要素もすべて共通語形に切換えられる、と指摘されており、＜共通語＞の＜丁寧体＞が《対調》談話の規範として意識されている、と考えられる。

(2) 普通体でもいちばん多いのは終助詞がつかない言い切りの文である。名詞終了も多い(32例中18例)。

(3) 普通体では「ネ」「ダネ」など共通語終助詞が使われることがある。説明などの際に、短く使われている。

[2]

019YF:あー。沢山 ですねー。この辺り 林檎の 品種は 何 に なるんですか？

020SA:品種は 一番 多いのは フジ フジ だね。

021YF:フジ、はー フジ 以外にも。

022SA:フジ とか、ムツ とか、(YF:はー)世界ー とか、品種は だいぶあります。

023YF:あ、そうですか。一番 多いのが フジ。

024SA:フジだね。

(4) 普通体では方言形終助詞や方言形文末形式も使われている。それらが使われているのは、話が盛り上がり、調査者と会話のやり取りが弾んできた場面である。

[3]

→124O:[笑]七十歳も なるもので。(YI:えー)忘れた ごと ぱっかり だでや。

125YI:馬とか 牛とか 使ったり、

126O:ん？あ、馬で やったな。

1127YF:あー。じゃ ここにも 馬がいたんですか。

128SA:馬が あった。

29YF:へー、たくさん いたんですか？

→130SA:馬、えーと 私 やってら 時 一頭 だけど、やる前は 二頭だったって。

131YF:はー、どんな 馬 でした？

→132SA:んー 気性が 荒い (YF:笑い) 馬だったなー。(YF:えー)扱う 人にも よるんだ びょん。

133YF:あー。じゃ この家にも 馬小屋 とかが あったんですか。

→134SA:1 人ー。前、そ、そごの うちさ あった がら。(YF:あー)この うち 建てでがら 二十 何年 なるんでねが。

[3] の談話例ではほかの談話に比べ、方言終助詞や方言形文末形式が多く使われている。いきいきとした表現をしたいときは普通体が選択される、ということだろう。

(5) 本データでは全般的に終助詞の使用が少ない。その一方で、聞き手目当て性がないた

めカウントから外した終助詞「カナ」「ナ」は多用されている。これらは、主に内省的、独り言的な用法で用いられていることが多い。

[4]

003YF: どんなものをつくっているんですか？

004SA: 林檎と米。

005YF: はー。この 辺りですと、田植えとかは いつ頃になるんですか？

→ 006SA: 田植えは 早い 人で5月の末頃 がな。5月の 20日ごろ がな。(YF: はー) 早い 人で。

(YF: えー) 遅い 人で 5月の 末頃 なるな。

[5]

→120SA: トラック なかった 頃は リヤカーとか。(YF: あー) いろんな なんて ゆーのがな ものを 使
ったな。

121YF: へー たとえば。

→122SA: リヤカーとか、忘れだな。

「カナ」のこのような使用はこの《対調》談話では13例使われ、さらに聞き手目当て性のない「ナ」も13例使われている。参考までに、同じSAの《対老》《対若》談話における「カナ」「ナ」の使用状況を見てみると、「ガナ」に関しては、《対老》談話で5例、《対若》談話で4例しか使われていない。こうしたことから、独り言的な用法を取ることで、丁寧体が必要な発話を回避し、聞き手目当てのある発話としては方言を使わないようにしよう、という意図の表れである可能性がある。ただ、津軽における談話スタイルという可能性もあり、検討が必要である。

以上のことから、次のように解釈できる。

- (a) 津軽では、丁寧体は共通語形式と認識され、フォーマル度の高い共通語形式である丁寧体が《対調》場面の基本コードとして、かなり厳密に選択されている、と考えられる。＜丁寧体＞を＜方言形式＞と一緒に使わないという原則は、その使用例が一例もないところから、かなり厳重なルールのようなものである。
- (b) 丁寧体では、方言形終助詞だけでなく、普通体では使われている共通語形終助詞でさえ一例も使われていない。この理由として①デスマスにモニターがいき、終助詞まで注意が回らない②デスマスに終助詞をつけることに違和感がある、などが考えられる。
- (c) 普通体で聞き手目当て性のある終助詞の使用が非常に少なく、一方、聞き手目当て性のない終助詞は多用されていることから、聞き手目当て性のある文脈での方言使用を避けることで「《対調》場面では方言使用を行わない」というルールをできる限り実行しようとしている可能性がある。

4.2. 高知幡多

高知幡多における丁寧体の出現状況、および方言形式との共起関係を見たものが表9で

<丁寧体／普通体>と<共通語形式／方言形式>の切換え

ある。

〔表 9 高知幡多：丁寧体の出現状況〕

共起形式	丁寧体		普通体		合計
	非方言形式	方言形式	非方言形式	方言形式	
出現数	67 : 27.2%	24 : 9.8 %	100 : 40.7%	55 : 22.3%	246

上の表からわかることは次のとおりである。

- (1) 丁寧体がよくつかわれているが、数は普通体の方が多い。
- (2) 丁寧体でも方言形式が使われている。
- (3) 普通体がよく使われているが、方言形式より非方言形式の方が多い。

丁寧体・普通体と方言形式との共起関係を詳しく見るため、節末形式に注目して出現状況をみる。

〔表 10 高知幡多：<丁寧体／普通体>と<共通語形式／方言形式>の共起関係〕

共起形式	丁寧体			普通体		
	共通語形式	φ	方言形式	共通語形式	φ	方言形式
終助詞	45	6	12	13	66(40) ^{*1}	16
	ヨ、ネ、 ヨネ、 カ、カネ、		ワネ(7) ロー(5)	ネ(9) カ(2) カネ(2)		ゼ(4) ワネ(4) ロー(8)
接続助詞	16	—	7	21	—	21
	カラ(7) ガ(8) ケド(1)		ケン(3) ケンド(4)	カラ ^{*2} (7) ガ ^{*3} (8)、 ケレド(3) ケド(3)		ケン(9) ケンド(12)
計 ^{*4}	61	6	19	34	66	37

*1 カッコ内の数字は名詞終了の数。

*2 順接のカラ：内 2 例は方言形に後接する。(ジャカラ、オルカラ、イカンカラ、シチヨルカラ)

*3 逆接のガ：内 7 例は方言形に後接する。(ジャッタガ、オルガ、シヨウガ、ワカラंगा)

*4 その他の方言形文末形式は、煩雑になるため表 10 から除外した。出現例は丁寧体では否定辞のンデシヨ 3 例、イカンデシヨ 1 例、ノダ文のガデス 1 例、普通体では、否定辞のン 7 例、イカン 2 例、ノダ文のガ、ガヤ、ガヨ、ガジャが各 1 例、ほか断定辞のジャが 5 例である。

上の表から次のことが考えられる。談話例も参考にして考察する。

- (1) 津軽と違って、丁寧体にも終助詞がつく。共通語形終助詞だけでなく、方言形終助詞も使われ、終助詞が多用されている。言い切りの文は少なく、以下のように強く断定するようなときに限られる。

〔6〕

076SA: 言葉ですか、(YI: はい)言葉は一ですねえ(YI: はい) (中略)

わたくしの、考え方ー そうゆう考え方です。(YI: そー、はい。)はい。

- (2) 丁寧体は従属節内でも使われ、共通語形接続助詞とも方言形接続助詞とも共起する。
また、丁寧体は共通語形否定辞とも方言形否定辞とも共起する。(表 10 注 4 参照)

[7]

→072SA:うん どうて こー、しもへ しもへとー、(YI:はい)ま むこ[向こう] しもですからねー。(YI:はい)で ここ 来たら こっち しもですけんど。(YI:ふん)宿毛では 向こうん しもですけん。(YI:ふん ふん ふん)それでー、んま そうゆう、(しーと息を吸う)様相で あの周辺へ ま 住宅がー あちこちん できた と。

(3) 普通体では名詞終了が特に多い。

[8]

062SA:(中略)また ほんで あれは あのー、若干 あれ ひろうに[広く] なっちゅうろかな(YI:はー)ひ 多少 ひろなっ、たろう と 思うけん、(YI:はい)ま 当時は 立派な道路。(YI:はー)当時のことじゃけん あ よんー ん? 四メートルで 二間。(YI:ふん)五メートルで ざっと 二間半。(YI:ふんー) 二間。(しーと息を吸って)ちゅーしゃく[?] そうですねえ 五メートル ぐらい あったろうか。(YI:ふーん) 軍用道路でね あれ。

(4) 普通体と丁寧体がひとつのターン内で入り乱れて使用される傾向がある。

[9]

096SA:わたしたりーや[私達が]ゆい、あの 言うとですよ?(YF:はい)おかしい。(YF:ふん)んーそんで (しーと息を吸って)そうゆうことでー (YF:うん)んー。言葉が 変わる 人が かわ ずーと 変わってー まあ結果、どうなるうけん、(しーと息を吸って)そんなことじゃなからうかねえ ゆてーま、(YF:はあ)ほんな 気持ち もっておるわけですねえ。(YF:なるほど)んー むずかしいねえ。

097YF:じゃ、SAさんが 昔ん時は、そのー 親とか、先生とか、先輩に対してー 俺と ゆわずにー (SA:言いませんよ) どんな言い方ー、してー

098SA:ま ころでは 親に だいたい わしじゃ と わ、こら わし ゆわあねえ。(YF:ははー) わし とゆうも ことを いいますよ?

(中略)

104SA:(前略)下のもんには 目下のもんに 自分よりか ひたのものにはおら。(YF:おら。はー)今の人は俺じゃ、言わね。(YF:はい)で 今の奴は 上も 下も 俺じゃけん。(YF:俺。はい)んで、兄から姉さん、親に対してはわし。(YF:ふん)うん、こ ゆう、ことです**ね。(YF:はー)今、その区別ん いん つね?(YF:ないです)ない。ひたも 上も 俺。(YF:はい)あ 立派なもんで → す。(YF:(笑い))だ 残念な それば 立派でないがよ。 [老一調]

104SAにおいて、「立派なもんです」と「立派でないがよ」が続いて使われているが、前者の丁寧体が相手を意識した説明表現であるのに対し、後者の普通体は自分の感想であることを強調した表現であると考えられる。

次の〔10〕でも、説明的な発言では普通体が使われ、相手の同意を求めるなど聞き手目当てが生じた時点で丁寧体に切り換えられている。

[10]

118SA:一般社会の人— あれ おせた〔教えた〕 知らんけど、(YF:うん)とにかく 子供は、あの一
うちにも、{笑い}子供らにも、言いますが もう 自分のことは 済んだよう あの一 わたしは
言いますよ? あ、{舌をうつ}とにかく 子供を 育てるには ゆうことは 聞くもんじゃない と。

119YF:ふん。

→120SA:でも することは 聞くがや。

121YF:うん。

→122SA:だから、子は 親の背中を 見て 太る と ゆう。

123YF:ふ—ん なるほど。

→124SA ゆうことは 聞かん。

125YF:はい。

→126SA:聞きませんぜ?

127YF:はい。

→128SA:が することは きく。

129YF:ふん。

→130SA:だから 親の 背中を 見て 育つがや。

これらのことから、回答や質問、同意の要求など聞き手を意識した表現には丁寧体が使われ、自分の判断や感情の表出には普通体が使われる傾向があるように思われる。

一方、方言終助詞は双方で使われており、聞き手目当て性に関わるものとしては丁寧体と普通体の切換えが優先されていると考えられる。

- (6) 推量表現について、松丸・辻 (2001) によると、共通語では丁寧体デシヨ—に対応する普通体「ダロー」が一般には使いにくいことから、東京下町では他の言語形式が普通体で話されるような状況でも丁寧体のデシヨ—が使われ、推量表現に関しては丁寧体と普通体の切換えが起りにくいという。しかし、高知では推量の方言形式「ロー」があるため、推量表現でも丁寧体と普通体の切換えが行われている。すなわち、共通語／方言形の切換えとして「デシヨ—／デスロー」があり、丁寧体／普通体の切換えとして「デスロー／ロー」がある。これらの切換えのあり方をみてみる。

[11]

216SA:ま、おおきに と ゆうことは もう、よそでは 通らんけんどこでは とおる 京都でも 通りますわねえ(YF:京都でも 通ります)おおきに と ゆうこと、(YF:はい)おそらく、東京辺りでもお

→ おきに とゆう言葉 通りますろうか あれ 今、今は とおろかねえ あれ。

217YF:今は たぶん。

→218SA:み、みなさん— しっておりますねえ。

知ってはいますけども あまり 使わない

→220SA:ふとう 普通は つかわんでしょう?

221YF:普通では使いません。

→222SA:おきや* あのー 友達、来た(YF:うん) あるいは てみやげん 持ってきた 帰る(YF:おおきに)おおきに、(YF:ゆわ)ゆわんでしょ?

[12]

298SA:大阪 まあ 兄弟 ありますがね、(YF:は、そうですか)うん。(YF:ふん)でもねえ(YF:ふん)や
→ はり あの ここの兄弟が 大阪 おるでしよ?(YF:はい)ほなも、大阪で 生活するには、大阪
弁で ま 生活しよらーね?(YF:はい)もー 何十年も おるから。(YF:はい)でも こっちから
→ ね、きよだい[兄弟] 行きますろ?(YF:はい)

[11] でみられるように、丁寧体は聞き手目当てのある確認要求表現で用いられており、普通体は聞き手目当てのない自問的な発話で用いられている。

一方、[11] [12] とともに方言形式と共通語形式が使われているが、その使い分けに関してははっきりしない。疑問文の「デショーカ」より「マスローカ」が好まれ、否定文では「マセンロ」より「ンデショー」が好まれるのかもしれない。

(7) 共通語と方言形の切換えについて、異なった方言を話すソトの人に対し、共通語で話そうと言う意識がある。談話の中で SA はその意識を語っている。

[13]

076SA:(中略)まあ 我々が 話すには やっぱし あの、昔から 子どもん頃から ここで おるふと
[人]と 話すの(です)よねえ(YF:はいはい)別に その、(中略)私の考え方は、あ 友達同士で 話すに、{舌を打つ}ここの人間が一、(YF:はい)この人とここで話すに、この言葉でよからうが と。(中略)まあ それはー かんじとひては やはり、時代の流れんで、(中略)やはり、この言葉ー、あ、でも、だいじであるけれど。おー できればよく[欲を]ゆ、ゆうと、その、アメリカ人とも、中国人とも、話しのできるぐらいなー、ことー考えると やはりーそれなの、そのー知恵があつとすればー 勉強をひてー自分のもんにしていく と。ゆうことがー 現在の、おー 人の考えじゃなからうか と。

以上のことから次のような解釈が考えられる。

- (a) 高知幡多では、切換えのバリエーションとして<丁寧体+非方言形式> <丁寧体+方言形式><普通体+非方言形式><普通体+方言形式>の4パターンが使用されており、丁寧体が必ずしも共通語と結びついているわけではない。丁寧体のデスマスが方言として歴史的に使用されてきた、という点が関係していると思われる。
- (b) 聞き手目当てのある発話かどうかによって切替えるのは、すなわちフォーマル度に関係しているのは、主として丁寧体と普通体の切替えであると考えられる。
- (c) ソトの人である調査者に共通語を使おうという意識はあるが、津軽ほど厳密ではない。

4.3. 東京下町

東京下町における丁寧体の出現状況、および方言形式との共起関係を見たものが表 11 である。

〔表 11 東京下町：丁寧体の出現状況〕

共起形式	丁寧体		普通体		合計
	非方言形式	方言形式	非方言形式	方言形式	
出現数	3 : 1.5%	0 :	203 : 98.5%	0 :	206

- (1) 東京下町ではほかの地域と違い、《対調》場面でほとんど丁寧体が使われておらず、圧倒的に普通体が使われている。非常に特徴的な状況といえる。
- (2) 形式的に方言形と認定できるものは使われていない。

〔表 12 東京下町：＜丁寧体／普通体＞と＜共通語形式／方言形式＞の共起関係〕

共起形式	丁寧体			普通体		
	共通語形式	φ	方言形式	共通語形式	φ	方言形式
終助詞	0	3	0	70	40(22)*1	0
				ヨ、ネ、ヨネ カ、カヨ		
接続助詞				47		
				カラ(21)、ンデ (4)		
				ケド(20)、ケレ ド(1)		
				ケレドモ(1)		
計*2	0	3	0	117	40	0

*1 カッコ内の数字は名詞終了

*2 その他の文末形式として、ノが 46 例。

上の表から以下のことが考えられる。談話例も参考にして考察する。

- (1) 丁寧体の使用例は非常に少なく、以下の 3 例だけである。

〔14〕

092SA: 変わったの 昭和 45 年。(YF: はー) 昭和 45 年ぐらいます。(後略)

〔15〕

097YF: ランチ

098SA: 食堂みたいな[も]の、(YF: はい) と、そかあ《それから》寿司屋の、んーランチでもって、寿
の、んー要するに シャリがね? (中略) だから 1,2 階 つかったの。(YF: はい) 私が
→ やってる 頃は、そーゆーことです。

〔16〕

186SA: かいこ 歯の、歯の 薬屋で かいこーさん ってゆー ビルがあったんだけどー (YF: はい) そ
れぐらい、ビルがあったのはね? (YF: ほう) (中略) でも今ほど高くは できないな?

→ (YF:はい)まだね?(YF:はい)そんな ところです。

〔15〕〔16〕では調査者の質問に対する長い説明の最後にデスが使われており、「説明をこれで終わる」という意思表示と考えられる。丁寧度をあげることで談話の流れを変えるいわば「フレームマーカ―」の機能を持ったものと考えられる。

(2)「ノ」で終わる文が 46 例あり、非常に多用されている。

〔17〕

006YF:何歳ぐらいで 寿司のーす、道に はいったんですか。

→006SA:{笑い} 恥ずかし 恥ずかしながら (YF:えー)私 寿司あ 握れないの。(YF:あーそうなん
ですか)

(中略)

→010SA:{笑い}そ それがつてーのは、あー あたしがね?中学 4 年のときにー、(YF:はい)父親が
死んだの。(YF:はい)18 歳で。

011YF:はい。でーそのまま、

→012SA:(前略)ま、ま、寿司屋、寿司屋だけじゃ ねんだ。そんな時に寿司屋と 乾物屋と 食料品やと、
(YF:あーあーあー)両方やってたの。(YF:はい)で、それをー、んーやって、(YF:はい)ほて
《それで》みんなでもって 生活を してたの。

これはノダ文のダを省略した形で、対人的ムードの「ノダ」(野田 1997)にあたる用法と考えられる。普通体であることもあって、年下の人を相手に解説するようなニュアンスが伝わってくる。このことから、初対面である調査者に対する発話として、フォーマルな対応とは言いがたい。調査者に対し、津軽や高知幡多とは違う意識で接していると思われる。

参考のため、東京下町 SA の《対老》場面を見てみると次のとおりである。

〔表 13 東京下町〕

SA→SC		SC→SA	
丁寧体	普通体	丁寧体	普通体
68	27	140	86

*いずれも文末の数字。

上の表から次のことがわかる。

(1)《対調》で丁寧体を使っていなかった SA が《老一老》の談話においては丁寧体を多用している。SC は SA より 15 歳年長であるが、SA・SC 双方が丁寧体を基調として会話しているところから、年齢差によるものではないと思われる。SA と SC は旧知の間柄とはいえ、同じ地域の商店主同士であり、親族や親しい友人とは違い、いわば仕事上の付き合いである。社会人のコミュニケーションにおける常態表現として、双方が丁寧体を使用していると考えられる。

- (2) 丁寧体と普通体が両方、使われているが、普通体は主に個人的な感想や回想をのべるときにつかわれている。野田（1998）鈴木（1997）で指摘されているように、会話が余り堅苦しくなりすぎないよう、自分に関することや感想を述べるようなことには普通体、相手に働きかけるような発話には丁寧体、というような使い分けをしつつ、丁寧体と普通体双方を使用しているものと考えられる。

[18]

314SC: えー 月島地域あ 増えたんです。(SA: へー) 後の 地域は 僅かですねー、で 今度 月島 これから もっと 増えます。(SA: うん) えー、人口が。全然 この、今の 新富町 この辺 ござのぶ っただけで 新富町、入船 湊、****、このー 町は あんまり、これからねー、中途半端で 駄目な 町に、(SA: ねー) まー 人口ん 増えんのは 月島地域ねー

→315SA: {間} だって 今ー、んと あ ど どこですか っ て 新富町 っ つつても わかりませんもんね？

(SC: ん) 八丁堀の 方が わかる。

316SC: 八丁堀 わかる。

これらのことから、次のような解釈が考えられる。

- (a) 東京下町では《対調》場面で丁寧体への切換えが見られないところから、津軽や高知幡多とは異なり、調査者に対し「違う方言を使う疎（ソト）の人」、という認識を持っていない、と考えられる。そのため、孫と同じ位の年齢の調査者に対して年齢による上下関係という認識が先行し、談話の大半が普通体で行われたものと考えられる。東京下町 SA のように初対面の《対調》場面で普通体を使うのが東京下町の典型的なケースとは必ずしもいえないと思われるが、このような例が見られること自体が他地域との認識の違い、東京下町特有の認識が現れたものと考えられる。すなわち、フォーマルな場面における共通語と方言という切換え軸が東京下町にはない、と考えられる。東京下町でも特有のカジュアルな表現はみられるが、こうした点からそれを方言として他地域の方言と同等に考えるべきではないと思われる。
- (b) 東京下町では社会人同士などのフォーマルな会話では丁寧体が使われ、フォーマリティーは丁寧体と普通体の切換えで表されていると考えられる。ただ、「フォーマル」の捉え方が異なっている可能性がある。

5. 地域間の比較

津軽方言話者、高知方言話者、東京下町話者の丁寧体と普通体の切換え、および方言形式との共起関係についてみてきたが、その結果を地域別にまとめて図示すると表 14～16 のようになる。

上段は丁寧体における方言形式との共起関係、下段は普通体における方言形式との共起関係を表す。組み合わせとして4パターンが可能だが、実際には以下のとおり、地域によって現れ方が異なっている。津軽においては丁寧体が共通語形式と固く結びついており、

方言形式と共起する丁寧体は存在しない。一方、高知幡多ではすべての形式が存在する。また、東京下町では方言形式との切り換えがない。

〔表 14：津軽〕

丁寧体＋非方言形式	
普通体＋非方言形式	普通体＋方言形式

〔表 15：高知幡多〕

丁寧体＋非方言形式	丁寧体＋方言形式
普通体＋非方言形式	普通体＋方言形式

〔表 16：東京下町〕

丁寧体＋非方言形式	
普通体＋非方言形式	

これらの地域的特徴について、以下のような解釈が考えられる。

- (a) 津軽において、丁寧体は共通語形式と不可分に結びつき、〈丁寧体＋共通語形式〉がソトの人に対して、強く志向されている。すなわち津軽では丁寧体は共通語と認識され、ソトの人に対しては丁寧な共通語を話すべきだという強い志向があるものと思われる。いわば共通語性重視といえる。

しかし、常に共通語の丁寧体に切り換えることができないところから、〈普通体＋共通語形式〉も用いられ、また、時には〈普通体＋方言形式〉が用いられる場合もあるが、極力、聞き手目当てのある文脈ではそれを避けようとしているように思われる。特に共通語の丁寧体と方言形の共起は厳しく、避けられている。

- (b) 高知幡多では、4 パターンがすべて用いられ、丁寧体が必ずしも共通語とは認識されていないことを示している。また、ソトの人に対して、津軽ほど〈丁寧体＋共通語形式〉が強く志向されていないように思われる。聞き手目当て性による切り換えが主に丁寧体と普通体の切り換えで行われ、そのどちらにおいても方言終助詞が使われていることから、高知幡多ではフォーマルな状況ではまず、丁寧体が志向され、共通語形式と方言形式の切り換えは二次的である。いわば丁寧体重視と考えられる。

- (c) 東京下町では他の 2 地域と様相が大きく異なる。《対調》場面で丁寧体への切り換えが見られないところから、方言地域の人が強く認識している、他方言の人に対するウチ・ソトという捉え方が存在せず、共通語形式と方言形式という切り換え軸がない、と考えられる。また、フォーマルな場面における切り換えは丁寧体と普通体の切り換えで行って

いるが、フォーマルな場面という捉え方も他地域とは違う可能性がある。

- (d) 以上のことから、丁寧体と普通体の切換えのあり方は地域によって異なり、フォーマリティについて、<丁寧体／普通体>と<共通語形式／方言形式>のいずれを優先するかという優先順位も異なる可能性がある。

6. まとめと今後の課題

<丁寧体／普通体>と<共通語形式／方言形式>の関係について、地域によって切換えの様相に違いがあること、優先順位や志向性が異なる可能性があること、また、それによってフォーマルというドメインの捉えかたやその対応にもそれぞれ違いがあると思われること、などがわかった。これらのことはまだ、問題提起の段階であり、今後はさらにきめ細かく検証していく必要がある。また、ほかの地域はどうか、など地域を広げて見ていく必要がある。

【参考文献】

阿部貴人・坂口直樹 (2002) 「津軽方言話者のスタイル切換え」

『阪大社会言語学研究ノート』4 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』

くろしお出版

高木千恵 (2002) 「高知幡多方言話者のスタイル切換え」

『阪大社会言語学研究ノート』4 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

野田尚史 (1998) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194 集

野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版

松丸真大・辻加代子 (2002) 「東京下町方言話者のスタイル切換え」

『阪大社会言語学研究ノート』4 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

まきの ゆきこ (大阪大学大学院生)

makino@mse.biglobe.ne.jp